



CRN設立10周年記念号

10th ANNIVERSARY

特別インタビュー

子ども・メディア・教育

石井威望 (CRN 顧問・東京大学名誉教授)

聞き手: 河村智洋 (CRN 外部研究員)

サイバー子ども学研究所

CRN

チャイルド・リサーチ・ネット

CRNの10年を振り返って

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）を設立して10年になったが、そもそもは1992年5月、The Norwegian Centre for Child Research（「ノルウェー国立子ども学センター」）によってベルゲンで開催された国際会議“Children at Risk”が出発点であった。20世紀冒頭に、スウェーデンの教育者エレン・ケイが「20世紀を子どもの世紀に」と呼びかけたが、世紀末になっても、世界の子どもの様々な形の危機状態は消えず、そのために我々は何をするべきかを考えるのが目的だったと言える。

それに招かれた私は、特別講演“Child Ecology, Perspectives on Child Health”を行った。世界に広がる多様な「子ども問題」“children's issues”の解決には、自然因子、物理化学因子、生物因子ばかりでなく、情報としての社会文化因子も含めて、生態学の生物学理論で捉える必要があることを述べた。

国際会議終了後、各国の代表的な研究者、実践者が20人程招かれて、まず何をなすべきかを、美しいフィヨルドが見えるホテルに泊り込んで話し合った。その結果、子どもに関係する世界の研究者、実践者をインターネットでつなぎ、話し合い、より良い方策を見出そうということになった。そして、その中心となる Childwatch International (CWI) がノルウェーに設立された。

子どもは「生物学的存在」として生まれ、「社会的存在」として育つ。子ども問題を考えるには、学際的、環学的な人文科学と自然科学を融合した新しい科学としての「子ども学／Child Science」が必要であると、個人的には1970年代中頃から考えていた。ベルゲンの一連の出来事で、改めて「子ども学」を体系づけ、日本子ども学会（2003年設立）もつくりたいと考えた。「子ども学」の普及とこの国際的な動きに対応するために、国立小児病院を退官した1996年、Benesse Corporationの当時の福武総一郎社長（現会長）の御支援により設立したのが、CWIのkey institutionになっているサイバー子ども学研究所“Child Research Net (CRN)”である。

設立に際しては、システム工学者の石井威望先生に御指導頂き、当初、ノン・プロフィットの組織とするため、福武教育振興財団の事業として活動を始めた。現在は森本昌義社長の御支援を頂き、Benesse 次世代育成研究所（社長・岡田晴奈、所長・小林登）の附属組織として運営されている。幸いアクセス数は1日3万件程あり、日本語版が最も多く、英語版、中国語版と共に、多くの方々の御支援により大きく発展している。

10年の節目を迎え、この機会に我々は、21世紀こそ子どもの世紀にすることを目的として、更なる発展を目指しているところである。

CRN所長 小林登





CRN設立10周年記念号

c o n t e n t s



21世紀を創造する サイバー子ども学研究所

2

特別インタビュー

子ども・メディア・教育

4

石井威望 (CRN 顧問・東京大学名誉教授)

聞き手：河村智洋 (CRN 外部研究員)

CRN 10年の足跡

8

「子ども学」の広がり

14

CRNの子ども研究支援

国境を超えての活動

16

中国語版開設後の“児童科学”

日中英3サイト紹介

多言語で世界に向けて情報発信

18

CRN ユーザーの声

20



21世紀を創造する サイバー子ども学研究所

Web2.0の時代となっても、
インターネットで世界をつなぐ
という夢を見失うことなく、
ベルゲンの国際会議の理念を
実現していく活動を
続けていきます。

CRNが誕生した頃

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）は、ウェブサイトを
通じて、子どもに関心のある
人々をつなぐサイバー子ども
学研究所です。小林所長が、
1992年ノルウェーのベルゲ
ンの国際会議で「世界の子ども
に関心をもつ人々をインター
ネットでつなごう」という提案
を受けたのが誕生のきっかけで
す。設立されたのは国際会議の
4年後であり、昨年で10年目を

迎えることになりました。

CRNが活動を始めた
1996年当時はパソコンの世
帯普及率は16%、インターネッ
トの世帯利用率は3%に過ぎま
せんでした。使用者の多くは研
究者やビジネスマンであり、子
どもに関心の高い主婦層など
にはまだまだ浸透していません
でした。その頃はアクセス数を
伸ばすことがもつとも重要な課
題となりました。

しかし、1999年頃からイ
ンターネットの利用者が急激に
増加し、それにともないCRN
へのアクセス数も伸び始め、さ
らに2001年にはパソコンの
世帯普及率もインターネットの
世帯利用率も50%を超えるよう
になり、月のアクセス数が80万
件を超えるようになりました。
サイトが活性化した原動力と
なったのはフォーラム（掲示板）
でした。とくにいじめや学級崩

壊、子どもの犯罪などが世間の
話題になると、それにともない
参加者の間で激しい議論の応酬
がなされました。現代の子ども
たちは危機に陥っているとい
う認識のもとでの熱い議論であ
り、人々の生の声を聞く意義は
ありましたが、残念ながら生産
的な議論に発展することはほと
んどなく、インターネットの可
能性とともに関界についても考
えさせられました。そして、子
どもたちの成育環境の向上に役
立つサイトにしていくための方
向転換を余儀なくされました。

共通言語となる リソースを探す

2002年頃からCRNは情
報リソース提供の活動に力を入
れ始めました。「国内外の研究
者の研究論文」「アンケート調
査のデータ」「学術集会やシン



ポジウムのインフォメーション」など、子どもに関する基礎資料をデータベース化していきまし。また、独自に子どもたちと接触する場を設けて、プレイフル研究やサイエンス・トークなどのワークショップやイベントを実施し、それらの研究成果をサイトに掲載していく活動も行いました。さらに子ども学の研究会も定期的に開催し、発達心理学、進化生物学、脳神経科学、小児科学などの多様な分野の研究者の方々に集まっていたとき、理論的な面も深化させていきました。

CRNのキーコンセプトである「子ども学／Child Science」は、特定の専門分野に偏らず、学際的に人々の興味関心をつなぎ、学問を開かれた場に戻して、活性化させる創造的な学問です。そのような子ども学の自由な発想を形にするにはインターネットは格好のツールです。しかし、たんに異なる考え方をもった人々が集うというだけではなく、そこには対話の相手を尊重するマナーとともに、議論の前提となる共通言語が求められます。CRNは子ども学を探究するための情報リソースを提

供する場として発展していきまし。

従来、子どもに関する学問は子どもへの願いや教育観によって主義主張が異なりやすく、また、それぞれの国の政治や文化の影響を色濃く受けて、普遍性をもちにくいという特徴があります。しかし、20世紀後半からのヒューマン・サイエンスの著しい進展により、子どもを考える上での共通言語が求めやすくなり、CRNの活動にもその成果が徐々に反映されていくようになりました。

活動理念を

見失うことなく 新しい時代へ

21世紀に入ると、インターネットのブロードバンド化はますます進み、当初の世界をつなぐツールとしての側面よりも、娯楽情報やビジネス情報を運ぶ商業的なメディアとしての側面が強くなり始めています。また、一方では家電製品のように日常的なものとなったことで、身の回りのよもやま話をやり取りするだけの内向きの「おしゃべりツール」とも化しています。時

間的・空間的・コスト的な制約をほとんど受けずに、世界中の人々が文字・音声・画像をやり取りし、共同研究ができる夢のツールであることが忘れ去られようとしているのです。

このような時代であるからこそ、改めて小林所長が参加したベルゲンの国際会議での「世界の子どもに関心をもつ人たちをインターネットでつなごう」という提案を思い起こすことが必要になってきています。その国際会議のテーマは「Children at Risk（危機にある子どもたち）」でした。地球規模の環境問題、経済格差、地域紛争が拡大しているいま、このような問題意識はますます重要になってきています。

Web2.0の時代となつて、CRNのような充実した総合サイトは徐々にその役割を終えつつあるのかもしれない。ブログと高度な検索エンジンが個々のサイトをどんどん軽量化しているからです。そのような情報環境の変化に対応する新しい試みも、今後必要になってくると思われます。

しかし、サイバー子ども学研究所の「子どもの生命の仕組み

と子どもが生きる生態系のあるべき姿を追究する新しい学問の枠組みをつくる」「子どもについて研究する世界中の人々と交流をはかり、情報や知恵を交換していく」という活動理念は、今後も見失われてはなりません。子ども学とインターネットの考え方はともにCRNには欠かせない重要なファクターなのです。

CRNは日本語サイトだけではなく、英語サイトや中国語サイトを設けることで、海外の研究者たちとの交流も積極的に行い、当初の目的どおり国境を超えた人々とのつながりを実現させつつあります。たった一つのパソコンからの発信が、人類への貢献へとつながる可能性もある。そんな素朴な夢も、まだまだ捨てる必要はないのではないのでしょうか。

子どもにとって優しい社会とは大人にとっても優しい社会です。子どもを考えることは未来を考えることです。CRNはこれから21世紀を子どもたちの世紀と位置づけ、すべての子どもが健やかに成長できる世界を追求していきたいと思ひます。

